

未亡人たちの行方

—Edith Wharton の ‘Roman Fever’ 論考

西 垣 有 夏

序

‘Roman Fever’ (1934) は、アメリカニューヨーク上流階級出身の二人の未亡人、アライダ・スレイド (Alida Slade) とグレース・アンスリー (Grace Ansley) によって、ローマの町を舞台に繰り広げられるイーディス・ウォートン (Edith Wharton) の作品である。本作品は、“Wharton’s famous and canonized short story” (Hoeller 166) と言われ、ウォートンが亡くなる3年前に描かれた晩年の作品ではあるが、“The briskness of this prose is encouraging: Edith Wharton had decided not to retire into permanent grumpiness; and she had not lost her ability to write effective fiction.” (Wolff 384) ということで、作者ウォートンから見たニューヨーク社交界特有の気難しさを色あせることなく描き出している。作者ウォートンはローマについて、“... had lived in the city of Rome when the JONES family went to EUROPE for six years ...” (Wright 215) であり、結婚時代に住んでいたこともあり、ニューヨーク上流階級を舞台に執筆する作者ウォートンが、ローマを舞台とする作品を描くのもごく自然なことと言える。

舞台はローマの町を見下ろすことのできる高台となっていて、アライダとグレース二人のやりとりで物語は進行する。アライダにはジェニー (Jenny)、グレースにはバーバラ (Barbara) という娘がそれぞれ一人ずついて、彼女たちはほぼ同時期に夫を亡くし、同時期にそれぞれ娘を連れてローマに旅行に来て、しかも滞在するホテルも同じと言う縁があって共

に行動している。あまりにも偶然が重なりすぎていて、かなり設定に無理がある感が否めないが、ニューヨークの社交界で伝統を一心に守ることこそが上流階級出身者としてのプライドや誇りであると信じて生きてきた女性たちとなると、行動形式が類似、あるいは一致してしまうのも必然的と言えるかもしれない。

上流階級で伝統を守るべく生活してきたということで、社交界では家族ぐるみの付き合いがある。そのため、アライダやグレースの先祖や子どもものこともテキスト中に記載されている。そのことは、“... she (=Edith Wharton) shrewdly incorporates what “Rome” has meant to three generations of women.” (Singley 64) と指摘されている。しかし、アライダとグレース以外の登場人物の詳細描写はテキスト中に存在しない。二人の娘たちは作品の冒頭部分にこそ出てくるが、それ以降は一切登場しない。また、夫を亡くしているため、夫についての事細かな描写はないが、このことは、“one of her ruling indices for the dangers of change that form a woman’s fate.” (Singley 64) ということの意味する。互いに二十五年間の結婚生活、家庭、家族として伝統を引き継ぐ立場にあった上流階級出身のアライダとグレースがローマの町を背景にやり取りをする本作品は、“a complex work of art, richly deserving serious critical attention.” (Petty 166) と評されている。本稿では、独身時代から結婚時代、そして未亡人となったアライダとグレースがお互いどのように感じ取り、語り手はどのようにこの二人を捉えているのかを分析していくことにする。

I Alida Slade の場合

まず、ニューヨーク社交界に君臨しながらも、夫を亡くして未亡人となったアライダ・スレイドについて述べていくことにする。本作品では彼女がグレースに語り掛ける場面や語り手を介して自身の意見を述べる場面が多く点在する。彼女については、“who was fuller, and higher in colour, with a small determined nose supposed by vigorous black eyebrows” (3-4)

と描かれて、伝統的奥様でありながらも上流階級の中できわだった特徴をもつ人物であることを象徴している。また、昼食の席をある女性と一緒にすると言う描写もあることから (7) 社交的な女性であることもうかがえる。伝統を守る女性として埋没することなく自分の立ち位置を確立しているよう存在であるという印象がある。

アライダは上流階級の人間としての自らの立場に神経質なほど気をもんでいた。アライダの夫、デルフィン・スレイド (Delphine Slade) が健在し、ニューヨークで過ごしていた時、向かいに住むグレースの家族の動向を常に観察していた。その様子を語り手は、“Mrs. Slade and Mrs. Ansley had lived opposite each other—actually as well as figuratively—for years. When the drawingroom curtains in No.20 East 73rd Street were renewed, No.23, across the way, was always aware of it. And of all the movings, buyings, travels, anniversaries, illnesses—the tame chronicle of an estimable pair. Little of it escaped Mrs. Slade.” (6) と言っている。この様子はアライダが、“... reveals Alida’s fear of what is kept repressed in her opposition to Mrs. Ansley” (Bauer 158) のためという解釈をしている。グレースは社交界での友人であり、同じ立場の人間なのだから、彼女に敵対意識を持っていることが表面化すれば自らの立場が危ぶまれる。良き妻であり、良き家族をもつ上流階級の人間としてのグレースはアライダにとって脅威だが、いつでもグレースのことは観察できる、お見通しであるということで自らの優位性を確認して心の安定を図っているのだ。

社交界の女性にとって夫の不在は、家族ぐるみの付き合いが必須となる社交界からの転落を意味する。アライダは社交界での自分の存在意義については友人のグレース相手できえ脅威に感じてしまうほどこだわりがあるだけに、夫のデルフィンを亡くしたことによる社交界からの転落のダメージはアライダにとっては非常に大きなものとなる。夫健在の時の彼女は、“the wife of the famous corporation lawyer” (7) であって、誰もがうらやむ立場であることがわかる。しかし、夫を亡くした彼女は、“It was a big drop from being the wife of Delphin Slade to being his

widow. She had always regarded herself (with a certain conjugal pride) as his equal in social gifts, as contributing her full share to the making of the exceptional couple they were: but the difference after his death was irremediable.” (7) であり、さらに彼女のことは、“Yes; being *the* Slade’s widow was a dullish business after that. In living up to such a husband all her faculties had been engaged; now she had only her daughter to live up . . .” (8) とさえ描かれている。しかし、夫の立場によって妻の社交界での存在意義や価値が決まるのが事実だ。いくら社交界での花形であっても夫を亡くし、未亡人となりうる。そうなれば伝統を引き継ぐものとして家族ぐるみにつきあいを必要とする社交界からは実質的に身を引かざるを得ない。アライダに残されたのは一人娘のジェニーだけとなる。

未亡人となり、家族として残るのは一人娘のジェニーだけとなるアライダだが、それでも社交界時代同様にグレースのことを意識する。アライダはグレースのことをライバル視しているだけでなく、娘のジェニーを引き合いに出してグレースの娘バーバラと比較することになる。アライダとグレースという同世代にとどまらず、アライダとグレースの娘たちの世代にまで、世代を超えたライバル関係まで築き上げている。アライダは娘のジェニーをグレースの娘バブス (Babs、バーバラの愛称) を比較し、“. . . Jenny has no chance beside her (=Babs). . . My poor Jenny as a foil!” (11) と感じている。さらにアライダは、バブスのことを次のようにとらえている。“I was only thinking how your Babs carrying everything before her. They Campolieri boy is one of the best matches in Rome. Don’t look so innocent, my dear—you know he is.” (11) バブスはいずれローマの名家との良縁に恵まれると考え、あげく、バブスの結婚後のグレースのことまで想像を膨らませる。グレースとバブス母子の将来について、“. . . she’ll sell the New York house, and settle down near them in Rome, and never be in their way . . . she’s much too tactful. But she’ll have an excellent cook, and just the right people in for bridge and cocktails . . . and a perfectly peaceful old age among her grandchildren.”

(12) という妄想さえ抱くことになる。誰もがうらやむ立場から転落して悲観的な発想に走るアライダはまさに、“Full of failures and mistakes” (9) である。アライダは社交界における家族ぐるみの付き合いの枠から抜けきることができず、自分の世代を超えて娘世代にまでライバル意識を持つことになる。未亡人となった今は社交界にとどまることができていないが、世代を超えた人間関係を意識してしまう点で、社交界の感覚を逸脱できない女性であることがわかる。

II Grace Ansley の場合

グレースもアライダ同様、ニューヨーク上流階級出身の女性として描かれているが、アライダほど目立った個性的な描写は少ない。アライダと比較すると彼女の発言はとても少なく、自分のペースで動いていると言う感じすらする。しかし、彼女の見た目の特徴として、“the smaller and paler one” (3) となっていて、ただ女流階級の人間として型にはまっているだけの女性像ではないことがうかがえる。作品中の彼女について分析していくことにする。

グレースの描写は確かに作中ではあまりない。しかしそれは個性を表に出さない彼女なりの伝統的奥様としての処世術と受け止めることができる。しかし、そんなグレースでも長年親しいアライダにライバル意識を持っていることがテキストにさりげなく描かれている。彼女はアライダについて、“Alida Slade’s awfully brilliant; but not as brilliant as she thinks,” (8) とけなした表現をしている。しかし、社交界上での建前で、このように多くを語る様子はテキスト中に存在しない。先に述べたように社交界での付き合いは家族ぐるみの付き合いとなるので、グレースはアライダだけでなく、アライダの娘ジェニーのことを、語り手を介して、“Mrs. Slade had been an extremely dashing girl; much more so than her daughter, who was pretty, of course, and clever in a way, but had none of her mother’s—well, “vividness,” some one had once called it.” (9) と述べている。同世

代で同じ立場にある人間同士のことだけでなく、子どもの事にまで言及しているのは家族ぐるみの社交界を経験したものの性と受け止めることができる。お互いの生活や同世代間だけの人間関係にとどまらず、伝統を引き継ぐものとして、その親や子どもについて意見を持つのも不思議なことではない。

グレースも夫をアライダと同時期に亡くしていることで社交界から実質的に締め出されているが、だからといってそのことで自らの立場を悲観的にとらえていないように見える。しかし、同じ立場のアライダのことを彼女は、“thought Alida lade was disappointed; on the whole she had had a sad life. . . ; Mrs. Ansley had always been rather sorry for her . . .” (9) と考え、アライダのことを同情しながらも哀れな女性であるときなしている様子さえ見受けられ、つらい境遇にいる人間のことを引き合いに出すことで自分の立場を確認しながらも心の均衡を保っているかのようだ。

グレースは一見おっとりしていて伝統を引き継ぐ上流階級の女性で“old-fashioned” (5) とさえ言えるため、アライダに対してライバル意識を燃やしている様子は見受けられない。しかし、大胆にもアライダの婚約者と逢引をする。グレースに言わせれば、“The most prudent girls aren't always prudent.” (15) なのだ。事の発端は、アライダがグレースの大叔母のハリエット (Great-aunt Harriet) が、恋敵の妹を冬の寒い夜にローマの町へ外出させ、妹は熱を出して亡くなった (14) という話に触発されたことにある。アライダはグレースが恋心を持つデルフィン (Delphin) の名を語り、冬の夜、寒いローマのコロセウムの外で待つという偽の手紙をグレースに書き、デルフィンと会えると思いきんだグレースが一人で寒い夜の街に外出させて傷つけようとしたことにある。コロセウムというのは、“... Wharton's identification of the Colosseum with experiences outlawed to women . . .”(Sweeney 318) であり、作品中でも、“Lovers met there who couldn't meet elsewhere” (14) となっている。それゆえグレースがデルフィンはアライダの婚約者であるとわかっていながらデルフィンと会おうとする筋が通る。本当にデルフィンからの手紙と信じたグレース

はデルフィンに返事を書いて、コロセウムの外で待ち合わせたため、寒い屋外で待つことなく中に入ることができたのだ。グレースがデルフィンがアライダの婚約者だと知りながら会う場面については、“... as a result of permitting Delphin sexual intimacy, Grace brands herself as a potentially unfaithful wife, setting off alarm bells in her lover’s mind.” (Saunders 164) となる。しかし、デルフィンがなぜアライダという婚約者がいる身でありながらグレースと会うと決めたのか、彼が書いていないはずの手紙に返事が来てそれに応じるようになったのかは全くもって不明だ。上流階級の間としての地位を確立しながらも拘束感、閉塞感に苦しめられていたのか、婚約者という立場として気が重かったのか、現状から逃れたいあまり何らかの冒険をしたかったのか、様々な憶測ができるがテキストに記載がないので分からない。このような描写もグレースの行動を引き立たせるための作者ウォトンの戦略かもしれない。その後体調不良となったグレースについて、アライダが、“the reason given for your illness, I mean—because everybody knew you were so prudent on account of your throat, . . . You had been out late sight-seeing, hadn’t you, that night?” (15) と解釈しているが、実のところは、病気になったのではなく、“a euphemism for pregnancy” (Weight 215) であって、コロセウムで逢引したデルフィンとの間に子ども、つまりバーバラができたので療養していたのだ。回復したわずか2か月後にグレースがホレイス・アンズレイ (Horace Ansley) と結婚することになった (18) のは、恋心を抱いていたデルフィンをアライダに取られた対抗心を燃やしたグレースの衝動的な行為ではない。結婚前にすでに婚約者のいる人との間に子どもができたとなると、上流階級に身を置く者として非常に体裁が悪くなるからだ。そのところグレースは上流階級としての立場でしたたかに生きているといえる。

Ⅲ 語り手を交えた Alida と Grace の描写

アライダとスレイドについての描写をしてきたが、それぞれに個性がありながらも、それでいても二人はお互いを長く知っておきながらもお互いに対する見解については語り手任せのところが多い。ほかの登場人物についての描写がなく、社交界でどのような人と出会っていたのか、社交界を離れた二人が周囲からどのような人物であると言われていたのか詳細事項がない。あくまでもこの二人中心で、お互いをけん制しあっているだけで筋が進んでいくのだから、二人の人物像についての説得性に欠ける。夫が不在のため、社交界と言う世界から事実上追放されることになった二人の未亡人の様子について語り手を交えて述べていくことにする。

アライダとグレースは二人の娘をつれて旅行に来ているという設定が、二人の上流階級からの転落を象徴している。旅行先のローマで二人があった場面で、語り手は、“each of them the modest appendage of a salient daughter.” (7) と述べている。二人の娘たちについては具体的にテキスト中には記載されていないが、アライダもグレースも二十五年結婚生活の後に夫を亡くし、さらに数年を経てローマで再会している (7) ので、娘たちの年齢は大体20代半ばか後半の、結婚適齢期の娘であることが予想できる。しかし二人とも誰かと婚約していたり、恋人と付き合っているといった描写もなく、結婚の機会がなく、子孫を作ることができない、伝統を受け継ぐ上流階級からの挫折を象徴している。

アライダもグレースも長きにわたって付き合っていることからお互いを知っているように読者としては考えてしまうが、そのような考えを語り手は、“... these two ladies visualized each other, each through the wrong end of her little telescope.” (9) と述べている。語り手に言わせれば、実はお互いのことがはっきりわかっていない。確かに偽の手紙でグレースをコロセウムに引き出したアライダは夫であるデルフィンとグレースが実際に会っていたことは二十五年以上経ってから知ったことで、グレースもデル

フィンが書いた手紙と信じ、それを心の支えとしてずっと生きてきたのだ。アライダにしてみればグレースがデルフィンに偽手紙に返事を書いていたこと、そしてグレースは手紙を書いたのはデルフィンではなく実はアライダだったことを全く気が付かないまま四半世紀あまりをすごしていたことがお互いを知らなかったという事実を裏付けている。

テキストをよく読み返すと、アライダとグレースの二人についての顔立ちや見た目の特徴こそ記載されていたが、社交界上で二人がどのような存在だったのか、また、夫を亡くして未亡人となった二人がかつての社交界や周囲の交友関係からどのように見られていたのかについてはテキスト中に存在しない。未婚時代、社交界時代と長きにわたって付き合いがあり、ほぼ同じ時期に夫を亡くしたことで交友を確認することができているが、本当の彼女たちの姿をテキスト中に垣間見ることができない。また、先に述べたようなアライダとグレースのライバル意識は娘に対する、世代を超えたライバル意識となっている。グレースの娘バーバラはアライダに言わせれば“effective” (6) であり、“brilliant daughter”(12) となっている。アライダの娘ジェニーはグレースに言わせれば、“had none of her mother’s—well, “vividness,” some one had once called it.” (9) となっていて、一見バーバラが優位に見え、グレースも、物語の最後で、“I had Barbara.” (20) といってデルフィンとの間に魅力的な娘を持ったことを誇らしげに語っているようだ。この成り行きについては、“... a title that is ironical because the two lovers met there and the passionate result was the birth of a child who becomes the brilliant debutante, while the supposed victor in this husband-chase, Mrs. Slade, produces a child who is socially colorless. That daughter is merely the offstage victim of her mother’s “badness.” (Tintner 76) となっており、アライダが偽の手紙でグレースをローマの寒い冬の夜に外出させた報いと評されている。しかし、二人の娘たちの見解はあくまでも二人の間だけのものにすぎず、第三者が二人の娘をどのように感じ、とらえているのかについての記載は一切ない。未亡人の母を持つ娘たちは、スレイド家とアンスレイ家それぞれの家系や伝統をひき継ぐこ

とができない存在であることぐらいしかわからない。

上流階級から転落し、人生の挫折を受け入れざるを得ないアライダとグレースの様子を語り手は述べている。上流階級の娯楽の一つであるトランプのブリッジに二人が参加する気がなく (10)、ローマの光景を眺めて時代の変化を見ることしかできず、何らかの行動に移すこともできない描写は上流階級出身者としての限界を示している。ローマの高台で二人が過ごす場面では、“... the two ladies had never before had occasion to be silent together, and Mrs. Ansley was slightly embarrassed by what seemed, after so many years, a new stage in their intimacy, and one with which she did not yet know how to deal” (9) となっているのは、かつて社交界に属していたとしても、その一員という立場に甘んじていただけで、自ら努力して勝ち取った上流階級の地位でなければ、その地位を自ら保つ意思がなく、所詮夫頼みの存在にしか過ぎなかったのだ。

実のところ、本作品の冒頭段階でアライダとスレイドの二人が社交界からの転落から立ち直れないことを暗示している。二人の娘がアライダとグレースをローマの高台に置いてどこかへ行ってしまふ場面で、“Well, come along, then,” と言い、さらに、“our poor parents” (3) と二人のことを話している。そのまま置いて行かれた状態になっている二人は、あたかも二人の行く末を、社交界から転落した存在であっても、その感覚から抜けきることができない二人の限界を象徴しているようだ。二人を置いてどこかに勝手に行く娘たちの様子は、上流階級としての伝統を引き継ぐことなく、自分で道を切り開く存在として映し出される。さらに、二人の視界から消えて声までも聞こえなくなるほど遠くに行く様子 (3) は、上流階級出身の身であったとしても、その伝統を引き継ぐことなく、上流階級からの転落を逆手にとって、上流階級の立場にこだわることなく自立して生きていこうとする姿であると考えられる。

結びにかえて

二人の未亡人について分析してきたが、仲が良いように見えながらもお互いライバル視、時にはライバル心がむき出しになるところもある。たしかに上流階級で伝統を引き継ぐことだけが彼女たちの使命であるのならば、自分自身がその中でも秀でた存在でありたい、目立ちたい、自分の存在を確認、確立させたいという欲望がでてくるものかもしれない。しかし、あくまでもこの二人の間だけでの話であって、かつて上流階級に所属していた二人のことをどのようにとらえているのかを評価している人物もいないのだから、結局わからずじまい、二人の間だけでのいざこざとさえ受け止めることができる。アライダとグレース、二人の間だけのライバル意識のみならず、二人の子どもの世代に及ぶライバル意識を持つ二人の様子は、家族ぐるみの付き合いをする上流階級社交界のあり方そのまま、夫の不在によって上流階級から転落したにもかかわらず、その感覚から抜け出すことができている、上流階級脱落者、というよりむしろ上流階級の感覚を全く意識しない二人の存在を想像することすらできない。しかし、アライダが夫の社会的地位によって妻の立場が決まる描写を見ると、上流階級出身であっても女性は夫頼みの存在にしか過ぎないのが事実である。夫の地位に頼って生きてきた女性が夫不在となればもう彼女たちに残されたものは何もない。これが華やかな社交界の女性たちの限界なのだ。ただ、本作品において、語り手はアライダ側の描写にいささか重きを置いていたきらいがある。本来語り手であるのならば、同じ立場で同じ境遇のアライダとグレース二人のやりとりで物語が進行している以上、二人とも主要人物なのだから平等に取り上げてしかるべきなのに、この点は語り手としての才覚に疑問を感じる。本作品における語り手についての分析は別稿で改めることとする。

アライダとグレースは二人とも上流階級の女性として伝統を守ることを使命として生きてはいるが、一見恵まれた立場にいるように見えても様々

な葛藤を抱えながら生き、それが歪曲した形となって行動に出ている。アライダはデルフィン婚約者という立場だったが、グレースがデルフィンに恋心を持っていることを知る以上、心穏やかに過ごせるはずはない。そこでアライダはデルフィンを差出人とする偽の手紙でグレースを冬の寒いローマの町に繰り出して故意にグレースを傷つけようとする。一方グレースは偽の手紙とわからずデルフィンに返事を書き、相手がアライダのスレイドの婚約者であるとわかっていながらグレースは逢引をする。このようなアライダとグレースの二人の様子は、“it is a reminder that art as great as hers is not only an aesthetic accomplishment but also a way to come to grips with the causes and cures of the maladies of the human soul.” (Lawrence 60) であり、“... experiences prohibited to women are *textual* as well as *sexual*.” (Sweeney 320) という解釈につながる。また、グレースの大叔母の妹のようにローマ熱にかかって命を落としたわけではないが、“The title reflects the metaphor of disease that is essential to the plot.” (Wright 215) ということで、倫理観道徳観に欠けた、人間としての欠如、人間性の病とすることができよう。

‘Roman Fever’ は、伝統を引き継ぐ上流階級の人間として生きていく以上、過去のこととはわかっていながらも過去に捉われ、上流階級という狭い空間のなかでのいざこざとなり、あげく人間としての倫理観道徳観を蝕まれてしまうものとして描かれる。いかに恵まれ、上流階級に属することができていても、夫の死によってよりどころを失い、上流階級から転落することで女の運命が変わってしまうはかなさ、上流階級出身女性の限界、人間としての心の動揺や弱さを見事にイーディス・ウォートンは本作品で表現している。

Works Cited

Bauer, Dale M. *Edith Wharton's Brave New Politics*. Wisconsin: The U of Wisconsin P, 1994.

Hoeller, Hildegard. *Edith Wharton's Dialogue with Realism and Sentimental Fiction*.

- Florida: UP of Florida, 2000.
- Lawrence, Berkove I. "'Roman Fever': A Mortal Malady." *The CEA Critic: An official journal of the College English Association* 56.2 (1994) : 56-60.
- Petty, Alice Hall. "A Twist of Crimson Silk: Edith Wharton's 'Roman Fever'." *Studies in Short Fiction* 24 (1987): 163-66.
- Saunders, Judith P. *Reading Edith Wharton Through a Darwinian Lens: Evolutionary Biological Issues in her Fiction*. Jefferson North Carolina and London: McFarland & Company, Inc., Publishers, 2009.
- Singley, Carol J, ed. *A Historical Guide to Edith Wharton*. New York: Oxford UP, 2003.
- Sweeney, Susan Elizabeth. "Edith Wharton's Case of 'Roman Fever'." Joslin, Kathevine, and Alan Price, ed. *Wretched Exotic*. NY: Peter Long Publishing, Inc., 1996.
- Tintner, Adeline R. *Edith Wharton in Context: Essays on Intertextuality*. Alabama: The UP of Alabama P, 1999.
- Wright, Sarah Bird. *Edith Wharton A to Z: The Essential Guide to the Life and Work*. NY: Checkmark Books, 1998.
- Wharton, Edith. *Roman Fever and Other Stories*. NY: Simon & Schuster, 1993. 本文の引用ページ数はこの版による。
- Wolff, Griffin Cynthia. *A Feast of Words: The Triumph of Edith Wharton*. NY: Oxford UP, 1995.